

第7回 「日本語大賞」

テーマ「わたし私がつか使いたいことば言葉」



中学生の部 優秀賞 受賞作品

花がつく語

東京都

早稲田大学高等学院中学部

1年 川村 俊太

私は、春休みに、京都の嵐山へ旅行に出かけた。その時宿泊した旅館の名は「花筏」であった。「花筏」とは、桜の花が散って花弁が水面を流れていく様子のことである。私が泊まった日は、残念なことに、桜はまだ、咲いてはいなかった。しかし、旅館から桂川をながめ、川の水面が桜の花びらの薄いピンク色で覆い尽くされた景色を想像しただけで私の胸はいっぱいになった。なんて素敵で素敵な言葉なのだろう。この言葉を聞いただけで、美しい水面の様子が一層美しく感じることはできないのではないだろうか。そして、この景色を言い表すには、これ以上の言葉は思い浮かばない程びったりだ。この言葉は京の都に住んでいた人も使っていたのだろうか。だとすると、昔の日本人の言葉に対する感覚は、とても、素晴らしい、と感じた。

日本には、花のつく言葉はたくさんある。小学校で、日本の中で花と言えば、それは桜を指すのだと教えられた。昔から日本人は桜を愛し、「花」という文字を含んだ言葉が多くある。桜が満開で、闇の中でもそのあたりがほのかに明るいことを花明り。花が咲くことやつぼみがほころびることを花笑み。遠方に群がって咲く桜の花が、一面に白く霞のかかったように見える様を花霞。他にも、花の顔ばせ、花の鏡、花冷え、花催、花の衾、花の袖など調べただけでも一〇個以上も存在した。その中でも私が一番気に入っているのが花吹雪という言葉だ。花吹雪とは、花の乱れ散る様子を吹雪に見立てていう語だ。吹雪とは冬の厳しい寒さを連想させる語だが、一言「花」という文字が入ると、花の暖かく、美しい印象を連想することができる。花吹雪が散ると表現するよりも花吹雪が舞うと表現した方が美に美しい。花吹雪の美しい、言葉の響きと共に美しい情景がパッと広がる。

「花」という語は和歌の世界でも沢山詠まれてきた。私の知っている百人一首にもだ。

ひさかたの 光のどけき 春の日に しづ心なく 花の散るらむ

花の色は 移りにけりな いたづらに 我が身世にふる ながめせしみに

日本人は古くから花が咲いている時の美しさはもちろん、花の散り際のはかなさにも心を引かれてきた。そういうのはかなさにも魅力を感じることができるのは、日本人の独特の感性といえるのかもしれない。

私は、桜の花が好きだ。寒い冬を乗りこえ春の暖かい日差しがぬくもりを感じられる頃に咲き始める桜が好きだ。薄いピンク色が街中の至る所に現れると心が躍りワクワクする。日本人が古くから桜の木を見て感動したきれいな心を私もずっと持ち続けていたいと思う。そしてまた花筏、花吹雪などの言葉を使うとともに美しい気持ちを忘れずに持ち続けていたい。